

第1章 ファカルティ・ディベロップメントの概要

1. 実施報告

主な活動は「授業評価」「授業公開」「FD・SD勉強会」の3点である。今年度、特筆すべき活動としては、授業評価とFD・SD勉強会があげられる。前者は「授業に関する学生・教員交流会」（第2章3節）において、メインテーマを『学生の 学生による 学生のための学生FDを考えよう！』と設定し、授業や学習環境の改善に、継続的かつ積極的に関わる学生の発掘を視野にいたした取り組みを行った。まさに学生主体のFD活動に向けて、第一歩を踏み出したと言える。また、後者のFD・SD勉強会では教務課との連携企画により、講師に竹中喜一氏（愛媛大学）を迎え、『教学マネジメントの推進にむけて～カリキュラムと個々の授業の関連を考える～』と題した講演（11月21日）を大学問題研究会（第4章）の中で開催した。講演は、本学2020年度以降の新学部体制を前に、学生のより充実した学びの実現に向けてシラバス等における適切な情報提供のあり方などについて理解を深めると同時に、その共通認識を教職員間で得る貴重な機会となった。

授業評価の中心的な取り組みである「学生による授業評価アンケート」では、一昨年度より、対象科目と実施数（アンケートの実施数と教員のコメント数を対応させるなど）の見直しを図り、また実施科目の選定方法（同じ科目を連続して実施しないことなど）の改善を行った。これは、科目の選定を教員自身で行うことにより、本活動の主体性を高める意味もある。さらに、その選定科目の提出やフィードバックコメントの提出には google フォームを活用するなどして、教職員の事務手続きの負担軽減を図り、活動本来の目的である「教育の質の改善、向上、維持」に向けて、その意図を積極的に教員に向けて発信してきた。結果、実施率は前期・後期ともに昨年度の好状況をほぼ維持するかたちとなった。前期は100%に近い割合であった（前期：昨年度 96.9% → 今年度 95.7%、後期：昨年度 91.3% → 今年度 92.3%）。また学生へのフィードバックコメントについては、後期は昨年度よりも 5%ほどの上昇がみられた（前期：昨年度 82.3% → 今年度 81.4%、後期：昨年度 73.7% → 今年度 79.3%）。ただし依然として、実施率に対してコメント提出の割合が低い。この点については、今後も要因を検討し改善を図る必要がある。さらに今後の重要課題として、昨年度に引き続き①アンケートの実施方法の改善（Web 版の導入や学内ポータルシステム等の利用）、②学生主体によるFD活動の実施、③授業改善の効果測定、などがあげられる。①については、2020年春以降、新型コロナウイルス感染防止対策の一環として遠隔授業の導入が必須となるなか、早期に実現することがのぞまれる。

授業公開に関しては、昨年度は実施方法を改善した成果が顕著であったが、今年度は大きな変化は見られなかった。昨年度は、一昨年度の参観総数（コメント数）36から 66と約 1.8 倍増加したが、今年度も昨年度とほぼ同様で 67という結果であった。実施方法の改善に関して、昨年度より、教員同士の授業時間の重なりなどによる参観の困難を回避するため、授業公開の期間を各学科（2週間から）1週間に変更し、見学の期間のみをこれまで通り2週間とした。公開時期を短縮することで公開側の負担を軽減するし、見学側の選択肢はこれまで通り確保する、という方法であった。この改善方法は学内において高く評価されたが、全教職員数からすると今年度も参観数が十分に達成されたと言えず、今後も効率的かつ効果的な授業参観に向けて検討の余地がある。